

## 二十一、和田の八幡様

和田の八幡様は、昔は和田村だけでなく、広く他の村にも氏子を持っていました。その範囲を、十八世紀の末に書かれた『筑前国続風土記附録』をもとにあげてみますと、次のようです。

田中村の全戸

高田村の一戸をのぞく全戸(その一戸は大隈村御霊社の氏子)

津波黒村の城戸姓の十三戸(そのほかは津波黒村御霊宮の氏子)

大隈村百戸のうち四〇戸(ほかの六〇戸は大隈村御霊社の氏子)

同書によれば、津波黒村御霊宮は宝永元年(一七〇四)に大隈村御霊社から勧請かんじゆされたものだといえますから、両者を同じとみれば、大まかにいって、和田八幡と大隈御霊社がこれらの村々で競合していると



いう構図になります。こんなことになったのは、ずっと昔、和田八幡のバックであった筈崎八幡宮と、大隈御霊社のバックであった太宰府天満宮との社領しやうりやう(荘園)が、これらの村々で入りこんでいて、たがいに開発を競ったらしいことが、ひとつの理由として考えられます。つまり、古い歴史の名残をとどめているわけです。

ところで一方、津波黒の城戸姓の十三戸だけが和田八幡に属しているというのが、目につきます。この十三戸はおそらく同族であって、和田八幡を産土神うぶすながみ(土地とその住民の守り神)というよりも氏神うじがみ(氏族の守り神)として仰いでいたのでしょうか。大隈村にもこんな事情があつたのかもしれませんが。

ですが、時代の進みとともに古い荘園制の名残は消え去り、何より大切な村の結束を保つために同族結合も背後にひっこんで、現在のように、村々に一社の産土神がそのまま氏神様と呼ばれるようになったわけです。いま町内で氏神信仰圏の再編が行われたり、その要求が出されている所がありますが、右のことは、ひとつの参考になりはしないでしょうか。

石段下には、町内最古の庚申塔があります。